

## エッセイ、回顧録

### アラビスト外交官の 39 年（第 14 回）

塩尻 宏

（中東調査会参与、元駐リビア日本国特命全権大使大使）

#### 《エジプト：「広報文化センター」の拡充》

1981年3月末にヨルダンから帰国して以来、6年3ヶ月の間に経済局資源第一課、調査部分析課、中近東第二課で勤務しました。1987年7月に在エジプト大使館に転勤発令となりました。3度目のエジプト勤務ですが、8月上旬に現地に着任し今回は広報文化担当を命じられました。今では全世界の27カ所の日本大使館や総領事館に「広報文化センター」が設置（平成24年5月現在、外務省資料）されており、日本関連情報の発信や各種文化事業の実施拠点として活動しています。

1950年代後半に「広報文化センター」の設置・運営が予算化され、1957年に在ニューヨーク総領事館に最初の「広報文化センター」が設置されたようです。1964年頃には在エジプト大使館にも予算上は「広報文化センター」が設置されていたようです。私が赴任した1987年当時の在エジプト大使館はカイロ市内中心部ガーデン・シティ地区の雑居ビル（Cairo Center Building）の4階（エジプトでは3階）にあり、私が担当する部署は広報班（Information Section）と呼ばれて、政務班や経済班と同様の位置づけでした。在エジプト大使館「広報文化センター」は中東・北アフリカ地域の広報文化活動拠点として、本来その事業予算は別枠で認められていましたが、当時は他の大使館予算と同様に会計班の管理下にありました。

私は、先ず「広報文化センター」の組織・機能の充実を図ることが必要と考えて、館内関係者（公使や総務班）の理解を求めると同

時に本省担当課（当時は情報文化局海外広報課）との非公式協議を始めました。本省担当課は広報文化活動の積極化について協力的でしたが、「広報文化センター」予算を長年にわたり一般経費の一部として利用していた在エジプト大使館内部では、今後はその予算を広報文化活動に優先的に使用したいとの私の申し出に対して相当な困惑と抵抗があったのを覚えています。1988年2月に広報班の名称を「在エジプト日本国大使館広報文化センター（Information and Culture Center, Embassy of Japan in Egypt）」と改称し、同時に大使館内や大使公邸などに散在していた広報用備品の所在確認と台帳整理、センター内の事務用備品の整備、広報車（現在は廃止されたようです）の優先使用权の確認などについて館内関係者の説得に努めました。

その後、「広報文化センター」事務所の拡張計画を策定して本省担当課を通じて折衝し、本省の承認と必要な予算が認められました。間仕切り工事などに数ヶ月かかりましたが、1991年6月に、大使館事務所と同じビルの3階（エジプトでは2階）に図書室、映写室、日本語教室などを備えた「広報文化センター」が完成しました。もともと手狭であった大使館内部では、私が担当する「広報文化センター」のみが大幅に拡充されることについて抵抗感があったようでしたが、同じ階の一部に領事・査証班を移転させることで何とか関係者の了承を得ました。その間、私は1988年12月に広域広報担当（東アラブ・北アフリカ）に指名され、域内の日本大使館の広報担当官の相談にも応じる役目を仰せつかりました。四半世紀も昔のことを思い出しながら書きましたが、現在、在エジプト大使館「広報文化センター」は、2007年10月にカイロ郊外のマアーディ地区に移転した新大使館事務所の2階に移っていますが、益々活発に活動していることは喜ばしいことです。

## 《エジプト：カイロ・オペラハウスの再建》

日本が中東諸国に対して本格的に経済技術協力を始めたのは 1973 年の第四次中東戦争を契機とした石油危機以降のことですが、当初からエジプトは中東における日本の ODA（政府開発援助）の最大の供与国でした。外務省資料（政府開発援助（ODA）国別データブック 2011）によれば、エジプトに対する援助額は 2010 年度までの累計で円借款 5,781.19 億円、無償資金協力 1,501.80 億円、技術協力 622.18 億円となっています。その一環として、日本は 1984 年から 86 年にかけて総額約 65 億円の無償資金を供与し、カイロ中心部のナイル河の中洲（ゲジーラ島）の一角にオペラも上演できる本格的な劇場施設を備えた「教育文化センター（Education and Culture Center）」を建設することになりました。その建設工事は 1985 年 5 月に始まり、私がエジプトに赴任した翌年の 1988 年 3 月に竣工しました。

もともとカイロには 1869 年のスエズ運河開通を記念して当時のイスマイル国王の命により建設されたオペラハウスがありました。その柿落しにはヴェルディのオペラ Rigoletto（リゴレット）が上演され、1 年後の 1971 年 12 月 24 日には同じヴェルディの作曲によるオペラ Aida（アイーダ）が初演されたことで有名です。エジプト人が世界に誇っていたそのオペラハウスが 1971 年 10 月 28 日に火災により消失しました。そのような経緯もあって、この「教育文化センター」の建設はエジプト側の要望に基づいて行われたものです。日本としては、ODA（政府開発援助）の本来の趣旨に鑑みて、より広く一般市民が裨益する教育文化施設を供与することとしましたが、エジプト側の強い要望によりメインホールには本格的なオペラ公演もできる設備を設けました。100 年以上の歴史を誇る世界的な文化施設であった旧カイロ・オペラハウスが焼失して以来、オペラハウスの再建はエジプト人の悲願でもあったようで、建設作業当時からエジプト人の間での通称は「新オペラハウス」でした。現在の正式名称は「国立文化センター カイロ・オペラハウス（National Cultural Center Cairo Opera House）」となっています。

ODA が、上下水道や道路、教育施設の整備など基礎生活分野への支援に重点が置かれていた時期に、オペラハウスの建設が適切かどうかについてカイロ駐在の日本の報道関係者の間で議論がありました。また、在エジプト・イタリア文化センター (Italian Institute) の館長などからは、オペラの伝統を持たない日本がカイロにオペラハウスを建設することを疑問視する意見が聞こえてきました。当時、ODA の担当ではありませんでしたが、日本の途上国支援の姿勢が問われていると感じた私は、日本のマスコミ関係者や外交団との接触の機会に、「日本は引続き基礎生活分野への支援は積極的に行っており、その上でエジプト人の精神生活を豊かにするために文化分野への協力を行うことが不適切とは思わない。発展途上国には文化活動が不要であるかの如き意見や、イタリアのようにオペラの伝統を自負する国がオペラ施設の再建を希望するエジプトに対して支援を行わずに、オペラの伝統がないことを理由に日本の協力を疑問視することは理解に苦しむ。発展途上国に対する支援は、それぞれの先進国が可能な方法で行うのが望ましいと考える」との趣旨で反論したことを思い出しました。

## 《エジプト：「教育文化センター」への楽器供与》

「教育文化センター」は、予定どおり 1988 年 3 月に竣工してエジプト側に引き渡されました。日本企業（日建設計、鹿島建設）の高い技術と勤勉な努力により建設された「教育文化センター」の建物は申し分ないレベルのものでした。無償資金協力事業としては完

結し、その施設の活用はエジプト側の責任となります。初代の館長

(Director) にはマグダ・サーレハ女史 (Dr. Magda Saleh) が任命され、私は彼女と「教育文化センター」の運営体制の確立と柿落とし行事の構想などについて頻繁に協議しました。サーレハ女史は、1960年代にポリショイ・バレエ団で研修し、かつ



てはプリマドンナを務めていました。その後、ニューヨーク大学で博士号を取得した才媛で、名実ともにエジプト・バレエ界の大御所として知られていました。

就任早々のサーレハ館長から、館内にピアノが1台も用意されていないので取り急ぎ最低限必要な台数のピアノを日本から提供して貰えないか検討して欲しいとの要請がありました。エジプト側と合意した日本の無償資金協力は「教育文化センター」の建物建設のみで、その利用に必要な音楽器材などはエジプト側が調達手配すべきものでした。しかし、オペラやバレエのみならずオーケストラなどのコンサート公演も想定している施設にピアノが不可欠であることは理解できました。また、日本のODAで供与した施設が円滑かつ効果的に活用されるよう適切な支援を行うのが日本の援助方針です。私は、サーレハ館長の要望を早速に本省に伝えて折衝を始めました。

当時はドイツに生産拠点を置くスタインウェイ社 (Steinway & Sons、1853年創業) のピアノが世界で最高級のものでとされていましたが、この機会に、中東・アフリカで最高の文化施設であるエジプトの「教育文化センター」に日本のヤマハ・ピアノを導入するのも良案と考えました。本省と折衝を重ねた結果、宇野宗佑外相 (当時、

後に総理大臣)のエジプト訪問(1988.6.24~25)の機会を捉えて、文化無償援助(4,700万円、1988.6.25署名)によりヤマハのグランド・ピアノ1台とアップライト・ピアノ4台を「教育文化センター」に供与することとなりました。さらに無理をお願いして、開所式に間に合うよう航空貨物便で送付してもらったことを覚えています。なお、この時の宇野外相のイスラエル・パレスチナ訪問に、私はカイロから同行してアラファトPLO議長らのパレスチナ要人との会談の通訳を務めました。

### 《エジプト：「教育文化センター」の柿落とし（開所式）》

1987年8月に在エジプト大使館に着任した私の最重要の仕事の一つは、「教育文化センター」の柿落とし企画案の作成と実施に向けての準備作業でした。エジプト側の考えを打診したところ、当時のホスニー文化相(Dr. Farouk Hosni)としては、せっかく日本の協力で建設された文化施設であるので、その柿落としは是非とも歌舞伎公演を中心に行うのが望ましいとの強い意向でした。私は打合せのため同相と幾度かお会いしましたが、1938年生れの彼は、当時50歳になるかならないかの年齢で、ムバラク大統領の求めにより1987年10月に在イタリア・エジプト大使館文化アタッシュェから大臣ポストに就任したばかりの新進気鋭の閣僚でした。実現すれば中東・アフ



リカで初めてとなる歌舞伎公演ですが、素人の私が想像しても相当大がかりな準備が必要と思われ、その実現の可能性は未知数でした。

当時、国際交流基金のベテラン職員であった遠藤 直氏が外務省に出向して「広報文化センター」の書記官として配属されていました。彼の意見は、時間的にも経費的にも極めて難しくはあるが、史上初のエジプトでの歌舞伎公演の実現に挑戦してみる価値があるのではないかというものでした。それに同感した私は、関係者の説得を始めました。当時の橋本 恕 駐エジプト大使に歌舞伎公演を目玉にした柿落し行事の構想を説明して了承を獲り付けました。中国課長として日中国交正常化（1972.9）の実務責任者を務め、情報文化局長も経験した外務省の大物幹部の1人であった橋本大使は、私たちの構想を了承すると直ちに本省幹部への働きかけに動きました。

同時に私たちは、数日間にわたる柿落し行事の具体案を作成して本省担当課や国際交流基金などと折衝し始めました。しかし、怖いもの知らずの素人でしたので、初日の歌舞伎公演と打上げ花火を目玉に、1週間にわたり日本人音楽家のトリオ・リサイタル、国際的オペラ歌手岡村喬生氏の声楽リサイタル、日本とエジプトの音楽家のガラ・コンサート、日本人写真家の写真展などを計画しましたが、歌舞伎の公演や著名な音楽家の日程などは通常1年以上前から決まっていると聞いて、先行きの不安に駆られたのを覚えています。限られた日数でしたが、最善を尽くすしかありませんでした。まさに恐れを知らない素人の野心的な計画でしたので、実現までには綱渡り的な危うさの連続でしたが、幸いにして、関係者の好意的な配慮や格別の協力によって、1988年10月10日にムバラク大統領夫妻の出席を得て「教育文化センター」の開所式（柿落し）が盛大に行われました。

## 《エジプト：歌舞伎公演と打ち上げ花火の顛末》

関係者の多大な尽力により実現した歌舞伎公演については、当時の在エジプト大使館資料によれば、五代目中村富十郎丈を筆頭に俳優 15 名と地方（じかた）、裏方、事務方を併せて総勢約 50 名、衣装や機材は 120 立方メートル（7 トン）という規模でした。これら関係者と大型コンテナで送られてきた荷物の受け入れや道具の据付け作業の支援などに大わらわでしたが、結果的には国際交流基金出向の遠藤書記官の大活躍で何とかしのげました。公演は柿落し初日の午後を超満員の観客を前に行われ、演目は歌舞伎「俊寛」、舞踊「藤娘」、狂言「棒しばり」でした。上述のとおり、中東・アフリカでは史上初めての歌舞伎公演で、エジプト全土にテレビ中継されました。その時にご縁のあった富十郎丈は、その後、人間国宝に選ばれて歌舞伎界の重鎮として活躍されましたが、2011 年 1 月に他界されました。

歌舞伎公演はエジプト国民に強烈な印象を与えたようで、公演後、数ヶ月間はエジプト人の間で頻繁に「kabuki」という単語が使われました。しかし、全く予備知識を持たない彼らとしては、一度観ただけで歌舞伎の芸術性を理解できないのは自然なことでした。特に「俊寛」が彼らにはおどろおどろしい印象を与えたようで、後日、エジプト人の友人から冗談めいて、彼らの間では、悪戯っ子をいさめるときに「kabuki が来るぞ」と言えばおとなしくなると言われていると聞かされました。





打上げ花火については、2年前（1986年）にもエジプトにおける日本週間行事の一環としてカイロで披露し、カイロ中心部のナイル河にかかる幹線道路（October Bridge）上に見物客が溢れて交通マヒを起こすほど大好評を得たと聞いていました。今回もそれに劣らぬほどの規模でカイロ市民を魅了したいと思い、各方面の協力や支援を求めて奔走しました。前回の経験を踏まえた遠藤書記官の尽力により、丸玉屋秘伝の尺玉5発を含む800発が用意されることとなりました。花火は爆発物ですので輸送に航空便は使用できません。何とか船便で日本からカイロまでの輸送手配が出来ましたが、エジプトでの引取りには通常の輸入手続きの他に軍や警察などの許可手続きが必要でした。また、打ち上げ準備と点火には日本の花火師の職人芸が必要ですので、国際交流基金に依頼して専門家派遣プログラムにより対応しました。

「教育文化センター」柿落し当日の1988年10月10日午後9時過ぎから約30分間にわたり、カイロの夜空に日本の職人伝統芸の結晶が鮮やかに花開きました。前回と同様にカイロ市民の熱狂的な賞賛を得ました。市内中心部のナイル河沿いの道路や建物には見物人があふれ、随所に交通マヒが起きたほどでした。私たち関係者にとっても感激と感動の瞬間でした。エジプト・テレビでは、当日の花火の写真をその後長期間にわたり番組の合間の背景映像として放映していました。

「教育文化センター」の開所式作業期間はまさに嵐のような日々でしたが、同僚や多くの関係者の支援と協力で何とか乗り切りました。今の私にとっては最も印象深く感動的な思い出の一つです。

（続く）